

## 碧峯奨学生インタビュー | 金武偉さん<ボストン大学ロースクール>

「世界に羽ばたく人材に」 弁護士、証券、投資会社での経験を経て独立

在日同胞の寄付と韓国政府の支援により1963年に設立された韓国教育財団は、在日同胞学生の学びを支えるため、長年にわたり奨学金事業を行ってきた。2003年には、グローバルな舞台で活躍を志す若者を支援するため、「碧峯奨学基金」を創設。今回は、その支援を受けて米国のボストン大学ロースクールを卒業し、ニューヨーク州弁護士となった金武偉さんに話を聞いた。

Q：現在のお仕事について教えてください。

A：M&A（企業の合併・買収）と米国証券法を専門とし、現在は投資会社を運営しています。また、投資先企業に経営改善を提言するアクティビスト、いわゆる「物言う株主」としても活動しています。

Q：アクティビストとして活動するうえで、大切にしていることは何ですか。

A：日本では、かつてのライブドア騒動で注目を集めた村上世彰氏の影響もあり、アクティビストは批判的な目を向けられがちです。しかし、私は投資先企業の価値向上のために、いかに質の良い提案をするかが重要だと考えています。

Q：その姿勢が具体的な成果につながった取り組みはありますか。

A：2022年に、東証スタンダード市場上場のフューチャーベンチャーキャピタル（FVC）で、株主総会において取締役全員が刷新される出来事がありました。私は、会社の成長戦略や開示姿勢に課題があると判断し、個人株主として全国の株主を訪ね、自身の提案への支持を呼びかけました。その提案はのちに可決され、自ら社長に就任しました。上場企業で株主提案により経営陣が交代することは極めて異例であり、大きな反響を呼びました。

Q：海外や国際的な仕事への関心は、どのように育まれたのですか。

A：幼少期から父に「世界に羽ばたく人になれ」と言われて育ち、自然と海外や国際的な仕事への関心を持つようになりました。将来は外交官になりたいと考え、英語の習得にも励みました。その後、高校を1年で中退して米国に留学し、カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）に進学しました。

Q：大学時代には、どのような経験が印象に残っていますか。

A：韓国人留学生との交流です。韓国語に磨きをかけるきっかけにもなりましたし、自分自身の韓国人としてのアイデンティティーを深める時間にもなりました。

**Q：大学卒業後は、どのような道に進まれたのですか。**

A：大学卒業後、ロースクールに合格しました。しかし、生活費を含め約 3000 万円という巨額の資金が必要で、資金不足により一度は入学を断念して帰国しました。それでも再挑戦を諦めきれず、ゴールドマン・サックス証券や JP モルガンで 4 年間働き、学資を蓄えました。しかし、それでもなお必要額には届きませんでした。

**Q：碧峯奨学基金には、どのように出会ったのですか。**

A：そんな折、2 歳上の兄から韓国教育財団碧峯奨学金の存在を教えてくださいました。MBA という条件には該当しませんでした。進学予定のロースクールが全米上位 20 位圏内という条件を満たしていたため応募しました。その結果、支給が決まりました。

**Q：支給が決まったときのお気持ちはいかがでしたか。**

A：長年の悲願がようやく現実になったという思いでした。受給式では、自然と涙があふれ出しました。

**Q：ボストン大学ロースクールでは、どのようなことを学びましたか。**

A：28 歳でボストン大学ロースクールに入学し、会社法や国際法などを学びました。毎日 500 ページに及ぶ判例を読み込み、膨大な英語の法律文書に向き合う日々でした。その経験を通じて、文書を解析するスピードが上がり、論理的思考力も鍛えられたと感じています。

**Q：ロースクール修了後は、どのようなキャリアを歩まれたのですか。**

A：ニューヨーク州弁護士となり、米国の法律事務所で 5 年間にわたり、M&A や米国証券法などの実務に携わりました。その間も「いつかは外交官に」との志を胸に秘めていました。しかし、次第に、弁護士として法律相談や書類作成に携わるより、自ら主体となって会社の経営に携わりたいという思いが強くなっていきました。

**Q：その思いが、投資の仕事につながったのですね。**

A：はい。2012 年に日本に戻ってからは、投資会社のユニゾン・キャピタルに入社し、投資業務に従事しました。その後独立し、2018 年にミッション・キャピタルを設立しました。

**Q：韓国教育財団への思いをお聞かせください。**

A：碧峯奨学金のおかげで今があると感じています。若き同胞の将来を金銭的事情で閉ざしてはならないという、先人の崇高な志が同基金の設立には込められていると思います。同基金で学んでいる人たちには、韓半島に縁のある出自を大切にしながら、グローバルに羽ばたいてもらいたいです。

**Q：先行きが不透明な国際情勢の中で、今後の日本経済をどのように見えていますか。**

**A：** 現在、世界ではウクライナ戦争やパレスチナ問題などが深刻化し、日本を含む北東アジアでも北韓のミサイル発射実験が相次ぐなど、先行きが不透明な状況にあります。そうした中で、日本の資本市場は過渡期にあると考えています。原材料高によるインフレや人口減少の進行などにより、企業は事業戦略の見直しを迫られています。今後は、経営体質を強化するための M&A がさらに盛んになり、大規模な業界再編が進んでいくのではないかと見えています。